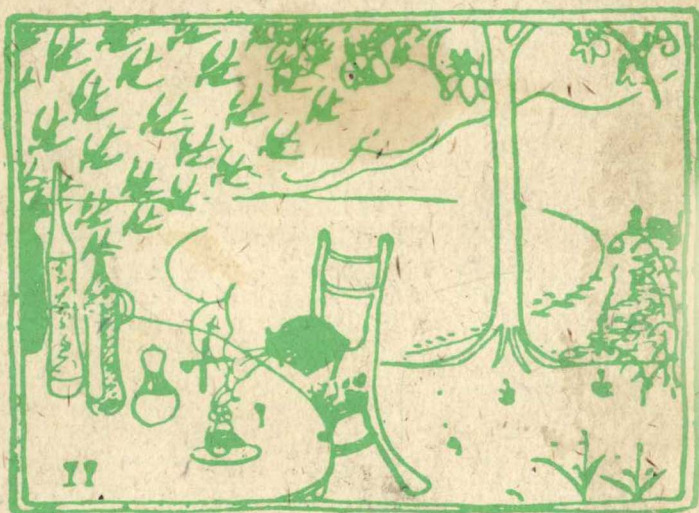


日本近代詩歌史

野山嘉正 著



東京大学出版会

日本近代詩歌史

野山嘉正 著

東京大学出版会

著者略歴

1937年 東京に生れる
1959年 東京大学文学部国文学科卒業
現 在 山梨大学助教授

主要論文

『『内部生命論』における世界像の変質』（『国語と国文学』昭43.8～9）
「近代批評の成立」（分担執筆，国文学全史 vol. 5, 昭53, 学燈社）

現住所 東京都文京区本駒込 3-14-7

日本近代詩歌史

1985年11月25日 初 版

[検印廃止]

著 者 の やま か し ょ う
野山嘉正 ©

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 田中英夫

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内
電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 株式会社精興社
製本所 牧製本印刷株式会社

ISBN 4-13-083015-5

83155

日本近代詩歌史／目次

序 詩歌史の論理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ⅰ

第一章 伝統詩の動向

Ⅰ 漢詩史の明暗 大沼枕山と小野湖山・・・・・・・・・・ 9

詩人枕山／江戸と東京／湖山の栄光

付 秋月章軒 詩と政治・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

2 文明開化期の韻文・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

『新体詩抄』とその周辺／和歌改良の諸相

3 『小学唱歌集』の位置・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

音楽と詩／伊沢修二の『個性』／詩としての小学唱歌／小学唱歌の芸術性

4 長歌改良論の史的意義・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

新体詩と短歌のあいだ／「想」と「形」／改良論の渦／長歌の運命

第二章 西洋詩憧憬の結実

Ⅰ 北村透谷における自己劇化・・・・・・・・・・ 79

富士山の観念／キリスト教のことばと仏教のこと

第三章 西洋詩と伝統詩

	とば／象徴の初発／言語と沈黙／透谷と藤村	
2	島崎藤村の詩業	103
	a 『若菜集』の成立	103
	藤村の『実験』／伝統詩との連携／長短の詩群 ／定型律の機能	
	b 『一葉舟』以後	122
	詩集と詩文集／『一葉集』と『夏草』／『落梅 集』の成熟／象徴主義と自然主義	
3	蒲原有明	137
	孤高の詩人／新しい律格／寓意から象徴へ／人 工と自然／マンダラ象徴	
4	薄田泣菫の詩語	170
5	近代象徴の成立	175
	白秋と近代詩歌／透谷とエマソンの象徴／藤村 の韻文論／白秋の象徴へ	
1	「明星」の出発	209
	新詩会と『この花』／直文の先駆／礼敵・鉄幹 父子／鉄幹の力業	
2	河井醉茗 詩の自立	228

「文庫」の詩人たち／自然と人間／文語詩から
口語詩へ

3 北原白秋の「詩」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 245

「詩」と史／絶対と詩人／詩と短歌―ドミナン
トの変化／「詩」の全域

4 茂吉と白秋・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 271

『白秋茂吉互選歌集』／『赤光』前後／白秋と
朔太郎／詩歌史の一断面

5 啄木と哀果・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 292

第四章 伝統詩の自己変革

1 正岡子規の「文学」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 303

a 歌論について・・・・・・・・・・・・・・・・・・

三人の訪問者／新短歌の創造／「詩」の長短／
写生―短歌と俳句

b 短歌と俳句・・・・・・・・・・・・・・・・・・

詩的直観と理論／紀行―木曾谷とみちのく／意
匠と言語

2 島木赤彦の初期・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 343

信州の韻文集『山上湖上』／水穂・空穂と赤彦
／左千夫と赤彦／短歌の近代

	3
近代短歌史の戦後	361
詩歌史のなかの短歌史／敗戦の衝撃／私／の	
表現／＼喩＼と定型／茂吉の戦後―詩歌史の問題	
あとがき	387

序 詩歌史の論理

なぜ萩原朔太郎が晩年になって短歌・俳句を未来の日本の詩と観念したのか、個人的な好尚だけでなく普通はいわゆる『日本への回帰』という近代思想のパターンとしても説明されているこの問題は、その説明にもかかわらず性急、唐突の印象を否定できない。初期の朔太郎が所属した明星派では、『国詩』という概括によって一般に「詩」を、新体詩・短歌・俳句を等価値と見なし平準化していたのであり、そこから巢立った朔太郎が第一詩集以前に歌集『ソライロノハナ』上梓を用意していたことが今日では判明している。北原白秋や石川啄木が短歌を後陣に配して「詩」の近代化へ打って出たことは周知のとおりだが、朔太郎は短歌をさらに押し下げ潜在化せしめて『詩人』として世に立った。しかしながら、短歌は（俳句とともにあって）死滅しなかった。その社会史的原因に今さらのように驚倒したからというわけでもなからうが、朔太郎が渾身を傾けた理論書『詩の原理』が短歌を排除する理由を発見できなかったゆえに、自身の詩風の変遷と時代色との自覚を前提に、倒立するがごとき感想を放ったのである。現に生きて存在するのはそれとして認識するのが理の当然だからである。

戦後の詩歌——もちろん俳句を重要な一部分として——は明治以来の詩歌近代化の帰結として、ほぼ平準化された。史的な問題の常としてそれを絶対視することはできないにしても、昭和二十年代の歌俳滅亡論を通り抜けた段階で、朔太郎の自裁に類するようなニュアンスを吹き払ったかたちでようやく、「詩」として歌俳を意識することがさして突飛なことではないとの通念が生れてきたのである。それは存在するものがとりあえずの平等を主張し得るといふ社会的状況に見合う事態であると考えることもできる。いまその点には深く立ち入らぬとして、これを明星派に逆照射すると与謝野鉄幹の「国詩」の主張との差異が浮び上らずにはないだろう。たとえば、鉄幹における俳句の欠如が何らかの重大な意味を隠しているのか、という問のかたちにおいてである。あるいはまた、俳句から短歌へ近代化の歩を進め新体詩を随伴する方向で正岡子規が行なった平準化とどこが違うのかという問題を惹起する。それらの問はダブル・イメージという主観の水準にあってそこから発しながら、動かすことのできない歴史上の事実にかかわっている。各々の史実としてのジャンルの平準化に傾斜バイアスがあれば、それが史実の個性を規定している相貌である。

朔太郎は『詩の原理』でもう一つ重大な指摘をしている。詩人だけが詩的行動の専有者ではなく、世の中には詩人に等しくあるいはそれ以上に詩的な行為者が居る、詩人であることの謂はそれゆえ詩的態度に加えて詩的言語の純正な使用にあると主張している点である。これは形式論と内容論をそれぞれ分立させながら、相互に関連させる方法を自覚的に選択した意味である。詩的言語の自律性の実際のありようを明確にした朔太郎の体験から割り出された画期的なものであったが、具体的な史実にあつてはもっと微妙である。たとえば『殉難前草』（慶応四年）に初まる四巻の詩歌集（城兼文編）の場

合はどうか。幕末の紛らわしいイデオロギー的な立場を別にして有名無名の作者の感情の率直さは疑い得ず、利害得失を超えて死は一人一人の身に重い。言語の自律性なる方法で吹き飛ばせないことは言うまでもなく、その際、詩的言語を截然たる価値として切り出すに容易でなくなる。その容易でないことを知った上で初めて芸術的価値は云々され得るであろう。価値の高低は確かにあるが、この場合、詩的教養の裾野の拡がりが問題の中心にあるからである。

この四巻の詩歌集はさらに漢詩・短歌・発句を併記し、それらに異なった価値基準をおしあてていないところに注目しなければならない。伝統的に積み重ねられてきたジャンルの序列はここに存在せず、しかも詩的教養それ自体の古めかしさは蔽うべくもないという事態になっている。これを仮に、漢詩を現代詩に置き換えて考えることは、思いつき以上のものではないが、それでも詩歌の近代化が生み出した現実の歴史とその幻想でしかなかった部分とを理解する端緒を提供しているように見える。『新体詩抄』が漢詩を避けて短歌のことばを採用したことは有名な事実だが、和語の系統の意識的な使用は、邦訳讚美歌や小学唱歌集の方が早い。西洋詩風の理解と詩語の関連は初期においてはぎくしゃくしたもののだが、漢詩と短歌は今日からは想像もつかぬほど近く、『童幼婦女子』の専有物がすなわち短歌であるというのは『新体詩抄』の編者による作為の結果に過ぎない。武家の嗜み^{たしな}として漢詩と和歌は共存した。しかし西洋詩の移入が、時代の大転換のさなかで殆ど僥倖のようにして生じていたジャンルの平準化を再編成したことは疑いを容れない。

そこで、切り離された漢詩の運命が、当代の「詩」の水準を考える際に欠かせぬポイントになるが、第一に明治年間における盛行という事実にもかかわらず、漢詩史がその後杜絶したために、詩歌史の

叙述が省略または簡素化を暗によしとしている難点がある。しかし、漢詩を除いた『新体詩抄』による近代の「詩」の出発という図式は、虚偽と言わぬまでも、もはやたくさんの制約の中に起きた一つの現象でしかない。第二に、漢詩が前代から引き続き返点または訓点を施して板行され、日本語の詩として読まれていたという事実がある。この検討するまでもないように見える自明の事実は、開国によって中国人との往来が自由になり、漢詩の中国語音が意識されて訓読の持つ価値がぐらついたという事情によって重大なものとなる。井上靈山が執筆した『現代日本文学全集』の漢詩史の叙述が中国語音の問題に多くを割いたのは、その必然の現われと見られるが(1)、それだけに日本語の「詩」の歴史としてのリアリティーが大きく脱け落ちてしまったのである。

しかるに訓読による漢詩の音が突如として消滅することなど起るはずもないのだから、両義的な価値において現実感を喪失しながらも、いわゆる訓読体または訓み下し体として漢詩は生き続ける。複雑な平仄法を習得してなお且つ日本語の音で読まれたのであるが、その際に訓読体の響きだけが現実感をもって持続したことは当然考えられる。たとえば、題詩に李白の古曲を飾った島崎藤村の『落梅集』に収める「旅情」(「小諸なる古城のほとり」「千曲川旅情の歌一」)は、殆ど漢文の訓読の響きであって、平仄の点で漢詩へ「復原」こそできないが、翻訳は可能である。五七調文語定型は変則的な「漢詩」の訓読に他ならない。藤村は中野道遥と比べられて説かれることが多いが、実際にはもっと大胆にしかしその独得な謙抑の装いの下に漢詩史と競り合ったものと思われる。朔太郎における漢語脈の問題について言えば(2)、『郷土望景詩』『氷島』所載の相当数の作品に訓読体を認めることができる。ただし、この場合は文語自由詩としてである。漢詩史を吸い取ったものとして朔太郎の終期の詩を考

えることもできるように思う。この事態を歴史的に溯っていけば、漢詩訓詁の伝統の中で文語をあたかも自由詩の響きとして使用するという事態が長期間にわたって続いていたのではないか、という推定も生じるし、その推定が全く無意味とは思われないのである。その脈絡で言えば自由詩の伝統は、様々な制限が付くとしても既往の概念を訂正しなければならなくなるであろう。

翻って思えば訳詩集『於母影』^{おもかげ}の中の漢訳はそれゆえ一つの偉観に属する事柄である。詩語のレヴェルを正格によって維持するならば、中国語の音によって翻訳されねばならぬだろうが、その種の仕事がいかなる貢献を新時代の日本の「詩」に対してなし得るのか、『於母影』編者の存念は想像に余るところである。鷗外の主宰した「柵草紙」が古典研究に熱心であったことはよく知られているところだが、その第一四号（明治二十三年・11）に「辨玉師和歌碑文」と題する一風変わった記事がある。明治十六年（一八八三）大沼枕山が^{もと}需めに応じて撰じた碑文の写しに和文の解を付したものである。僧辨玉は長歌に優れた歌人、枕山は芝増上寺に仮寓した当時、芝山の学僧辨玉としばしば往来し相識の間柄であったが、『国歌』の巧みであるとは知らなかったという。一別以後、横浜の三宝寺に在職した辨玉に生前会うことなく、明治十三年に没したと聞き銘を作って悼辞とした⁽³⁾。

神奈川浜	隠殆三紀	梵唄纔終	古歌便起
唯娛水石	豈念桑梓	玩東海光	契西行旨
齡欠脩返	名敷還邇	此勒貞珉	不朽足恃

長歌は新体詩が登場して、その新と古の両義の間で揺れた形式の「詩」である。幕末明治の代表的な漢詩人としての枕山の胸にどのようなことが反響したか、しなかったか、あるいはまた、新しい「詩」を二老が観念したか、すべきであったか、「柵草紙」は記事を提供するのみである。

「詩」は現代の慣用に従えば「詩歌」である。俳句も含めて、本書ではその慣例に従うことにする。用語の不安定は史実であってやむを得ないところだが、むしろ、その不安定こそが近代の詩歌すなわち広い意味の詩の展開における各々の詩人の含蓄する傾斜バイアスの正体に他ならない。いわば遍在する不安定のありようを説明することが近代詩歌史の課題であって、以下の論述はそのために捧げられている。

注

- (1) 第37編(昭4・4)所収の「明治大正漢詩史概観」、北原白秋執筆の「明治大正詩史概観」と併載。

- (2) 『氷島』の詩語の問題が論争的であったこ

とについて篠田一士氏が回想的に語った文章「世界のなかの現代詩」(『文学界』昭60・6)を参照。

- (3) この碑は横浜市神奈川区高島山公園に現存。

裏面に辨玉の和歌を刻す。

第一章

伝統詩の動向

I 漢詩史の明暗 大沼枕山と小野湖山

1 詩人枕山

幕末から明治へかけて漢詩一筋に生きた大沼枕山が、永井荷風の『下谷叢話』によって文学史に蘇ったことは夙に有名な事実である。文学上の先達としての森鷗外が枕山の弟子たらんと志して果さなかったことを踏まえて史伝のスタイルで綴った文章には、反俗を貫いた枕山へのただならぬ想いが沈潜している。風流、旅行、酒、貧窮など枕山のテーマは多岐にわたるが、一貫して変らぬのは時世にかかわらぬ姿勢であり、幕末の擾乱期にあってもその姿勢は保たれたと一応は言えるだろう。富士川英郎氏や中村真一郎氏が早くから指摘するように(1)、漢詩人は日常生活を細叙する術を会得しており、非政治的な局面に視野を限って、もっぱら反俗を事とすれば、生きてゆけないことはなかった。枕山はそのように跼蹐した人物と見られないこともないのである。

しかし、基本が非政治であり、また、反俗にあるならば、俗に対する意識的な姿勢を想定するのが